



## 第38話 「闘争」

誤解を恐れずに言うと、経営とは一言で表すと「闘い」です。四方八方四六時中、様々な所から常に攻撃を仕掛けられていると言っても過言ではなく、ファイティングポーズを一瞬たりとも降ろす事はできません。

これは僕が高2の時の話です。当時下校の時はいつも最寄りのM寺駅を使っていたのですが、その日はちょっと気分を変えてちょっと遠いM谷駅に寄って帰りました。

というのも、その駅のショッピングモールには、安い上に超ロングのボリュームのあるフライドポテト売っている店があり、それを食べたくてM谷駅に行く事にしたんです。

念願のフライドポテトを購入し、広場の真ん中にあった背もたれの無いタイプのベンチに腰掛け、さあ今から食べようと最初の一本に手を伸ばしたその時、いきなりベンチの僕の後ろに「ドカツ」と座ってくる人がいたんです。

『いくらでも座るところあるのに何やねん・・・』と思い顔を見ると、地元でもかなりヤバすぎてヤバすぎて誰も話しかける事の無いOという男の姿が（闇金ウシジマくんに出てくるキャラクターレベルのヤバさ）。

僕も実際に会ったのは初めてでしたが顔くらいは知っていて、噂で色んな悪さをして「塀の向こう側」にいると聞いていたので『なんでこいつがここにおるねん・・・！』とビックリしました。

で、ビビって固まっている僕に対して「おお・・・、お前美味そうなもん持っているやんけ・・・。俺出てきたばかりで金なくて何にも食われへんねん・・・。それ、くれや・・・。」との言葉が。

自分としても楽しみにしていたフライドポテト。しかもまだ一口も食べてもいない。

そしてよく見ると自分と年齢も変わらず、当時ガリガリだった自分と大差ない体格。確かにOは「危ない奴」とはよく聞いていましたが、「強い奴」という話は一度も聞いた事がない。

さらにその頃友人とプロレス技をよくかけ合っていて、非常に「闘う」という事に対してアグレッシブだったんです。

「この街でOを倒したという事になれば、俺も少しは名を上げれるのでは・・・！」という気持ちが沸々と湧き上がってきて、僕は無謀な闘いを挑む事になったのです。

次号へ続くっっ！！